

豊かな自然の恵みの中で

育まれたアイヌ文化

アイヌ民族は、古くから北海道を中心に東北地方北部及びサハリン（樺太）南部、千島列島に先住してきた人たちです。独自の言語を持ち、本州や大陸など周辺の文化と互いに影響し合いながら豊かな文化を形成してきました。漁狩猟・採集が生業の基盤でしたが、東北地方や大陸との交易も盛んに行っていました。

江戸時代中ごろからの松前藩による支配、明治以降の同化政策などで独自の文化は否定され、搾取や差別を受けるなど、苦難の道を歩んできました。その文化は受け継がれ、今日に伝えられています。



アットウシ

「アットウシ」は、オヒョウ（ニレ科の樹木）等の内皮を糸にして織られた反物を仕立てた着物です。仕事の大半を糸作りが占め、煮たり漬けたりして柔らかくした樹皮の内皮を、手で細く裂き、結び合わせます。樹皮は均一に咲く必要があり、作り手は指の感覚だけで太さがわかるといいます。織り手の体と織り機を固定させて織る方法や道具は、100年以上前からほぼ変わっていません。

表紙の商品 アットウシ 2,000,000円 [貝澤竹子]



ニマ 135,000円 [貝澤徹]

北海道初の伝統的工芸品 二風谷イタと二風谷アットウシ

日高地方びらとり・平取町二風谷さるの沙流川流域には、アイヌ文化に脈々と受け継がれてきた手仕事の伝統が、色濃く残されています。おもに男性の手仕事とされる木彫のうち、多彩な文様がほどこされたお盆「イタ」、そしておもに女性の手仕事である、樹皮から糸をとり織り上げる反物「アットウシ」が、2013年3月、北海道で初めて経済産業省の「伝統的工芸品」に指定されました。アイヌの生活様式や精神性と合わせて、あらためて二風谷の伝統工芸、アイヌ文化に対する関心が高まっています。

「イタ」は、もともと文様が際立つ木彫の工芸品といえるでしょう。アイヌ語で「モレウノカ」という渦巻型の文様や、「アイウシノカ」という棘状の文様、「シクノカ」という目のような文様が組合わさって美しいアイヌ様式の模様を形作ります。さらに二風谷イタには必ず「ラムラムノカ」というウロコ彫りが、文様の隙間を埋める様に彫り込まれています。かつてのアイヌの人々の暮らしの中での作品は日用品として、現在は現代作家による緻密な工芸品として存続しています。

イタ

サラニプ

木の皮を材料に、衣服や袋、かごなどの生活用具を作ってきました。「サラニプ」もそのひとつです。サラニプは、山・川・畑などへ出かける時、弁当や道具、山菜を入れるなど様々な用途で使われてきました。

左中：イテセサラニプB 55,000円 / 右下：オシケサラニプ(底丸) 75,000円 [貝澤文俊]

